

氏名	おう さわ ぶん 王 澤 聞
学位の種類	博士(芸術)
学位記番号	甲博制第46号
学位授与の日付	平成29年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当(課程博士)
学位論文題目	伝統モチーフからタイポグラフィーの新視点
作品テーマ	タイポグラフィーにおける中国文化のアイデンティティ
論文題目	タイポグラフィーと漢字
論文審査委員	主査 教授 高橋 善丸 副査 教授 山形 政昭 副査 客員教授 井上 斌策

内容の要旨

王澤聞(以下申請者と略す)の研究テーマ「伝統モチーフからタイポグラフィーの新視点」については以下の要旨となっている。本論文は漢字における「書」の表現につき歴史を辿って検討分析し、その中から精神性までも汲み取ることにより、タイポグラフィーの表現に、新たな啓発をもたらすということを論じたものとなっている。

4つの章と結論で構成されており、第1章「文献の研究」、第2章「伝統美意識の研究」、第3章「タイポグラフィーと伝統の書体」、第4章「制作の実現」、結論となっている。

第1章は文献を基として、中国古代に始まる書の表現の伝統と特色を歴史に沿って検証している。それは、甲骨文字、金文文字、篆書体の萌芽期。隸書体、行書体、草書体、楷書体の成熟期。書体が多様化した繁栄期と、段階的に論じている。さらに、儒教、道教、仏教の伝統思想を合わせて論じたもので、書の表現の広がり、中国の伝統的思

想としての様式観、自然観などとの関連性が述べられている。

第2章は書体の構成と美意識を論じたもので、「4つの美意識」として1、簡潔の美、2、バランスの美、3、気品の美、4、境地の美、として抽象的な美意識を分析し論じている。以上の1章と2章で漢字と書体の変遷を分析し論じている。

第3章は「タイポグラフィーと伝統の書体」で両者における共通性と独自性、両者の関連について論じたもので、字数も9000字を超える分量があり本論の中心をなす章となっている。本章は7節、10の項目として書かれ、豊富な内容がよく整理され記述されている。

3-2節「グリッドに関する法則」では、書体に備わるグリッド、つまり制約によって個性とバランスを得る、その構成はタイポグラフィーにも援用されると指摘している。また、3-3節は美的表現について「平衡と対比—静と動」として、あえて不安定な図形を通じて平均と対比する美を語り、「形と空間—実と虚」では、描かれている部分と余白とのバランスを述べている。また、「平面と立体—黒と灰色」では、墨の濃淡による絵画的な立体表現について言及している。その後、文字の骨格としての「線の運用」や、書のセオリである「結字36法」についてを語り、「視覚心理」に与える影響に至まで、書とタイポグラフィーとの比較分析を徹底して論じている。

第4章は書の構成を基とした新たなタイポグラフィーの制作論として書かれた試論である。伝統の書体として隸書、草書、行書を取り上げ、また書の構成要素に点の表現、線の表現、面の表現など、各々それらをテーマとした自身の書体作品をピックアップし、そこに潜んだ書の世界性までも抽出した背景を語っている。また、これらの筆法によるタイポグラフィーを応用したポスター作品の制作に向けた構想と目標が述べられている。

結論においては、本論内容をまとめた上で、書における「筆画」「結字」「章法」および「風格神韻」はタイポグラフィーにおける筆画のデザイン、配置、ディテールと相似点が多いこと、さらに書の作品にみる深い情感などはタイポグラフィーの思想に一致するとし、書における美的表現はタイポグラフィーの創作の基となるとしている。

申請者の論文「タイポグラフィーと漢字」は本文総字数、37,092文字となっている。

審査結果の要旨

本論文の審査は1月12日13時30分より、大阪芸術大学情報センターに於いて、主査と副査を含む中で質疑をともなう審査会が実施された。また、この論文の審査の後に、申請者の博士作品展を同開場隣で、実技作品B0サイズのポスター14点を参加教員全員で確認し、作者同席の上で質疑を行った。論文審査では申請者が論文「タイポグラフィーと漢字について」の要旨を述べ、その後審査員他の先生方よりの質疑に答弁した。

本論文は、申請者が当初より抱いていた「新しいタイポグラフィーの在り方」に、自国の「中国伝統文化の底辺に流れているアイデンティティー」を如何に表現出来るかの命題を、論理だてるものとして位置づけている。まず源流を書道芸術による漢字構成の美意識に探り、書道とタイポグラフィーの双方の文字構成や規律、及び書道文化とデザインの関係等を論理的に分析している。

その上で、タイポグラフィーによる視点から文字を問い直し、現代に生き続ける審美性とコミュニケーションの記号として、新たな造形の可能性を独自の視点で生み出す取り組みとして昇華させた。そもそもタイポグラフィーという概念は欧文活字から派生したものであり、デザインの概念と共に合理的コミュニケーションの手段として発展して来た領域である。しかし申請者はそのモダニズムに源流を求めるのではなく、中国の書道に、さらにその技法ではなくその精神性を読み解くことに視点を向けたことが、デザインの領域の中では新鮮であり、オリジナルな作品開発へと繋げていくことができたと言えよう。

まず、論文への取り組み姿勢に対して論文指導を担当した山形政昭副査は以下のように述べている。「論者は、論文作成に向けて「漢字」の伝統と造形に関する多くの文献を渉猟し、書の世界を広く把握し理解を深めてきた。その跡が序章の先行研究に記される通り、中国における書の底本と目される、李鑫華の『中国書道の文化』を始めとす

多くの文献であり、加えて近年の宗白魯（そうはっか）の『筆法美的探索』などに及び、その他基礎的文献は余さず押さえられている。」とその意欲に対して評価している。論文内容について、井上斌策副査は「漢字芸術の変遷を中国の様々な時代の書から萌芽期～成熟期～繁栄期とに分け、儒教文化、道教文化、仏教文化、の影響視点からも深く読み取り、審美性の推移を調べ上げている。特に境地の美に関しては、書道の持つ心技体の不可欠の要素をタイポグラフィーという現代のデザインにおいて如何に取り入れる事が重要かについて、問い続けている。」と述べている。また、山形副査の各項目に渡っての論評を抜粋すると「第 1 章では、中国の伝統的思想としての様式観、自然観などとの関連性を巧みにまとめている。第 2 章では、欧陽詢の『結字 36 法』などからの引用、抽出した図版が様々に提示されており、魅力的かつ説得力のある記述であり成功している。例を挙げると気品の美については『音のない音楽、形のない舞踊』という指摘、境地の美については『創造と心の融合によって形成された生命力ある結晶』など意味深い説明に努めた記述には快いものがある。第 3 章の『グリッドに関する法則』では、書体に備わるグリッド、つまり制約によって個性とバランスを得る、その構成はタイポグラフィーにも援用されるという指摘はユニークな指摘といえよう。加えて『結字 36 法について』、『視覚真理という角度の分析』では文字の多種多様な筆法、そして視覚の分析など、具体的な検討と指摘を試みている点、堅実であり好感がもてる。第 4 章は書の構成を基とした新たなタイポグラフィーの制作論として書かれた試論であり、結論においては、論者の作品制作においても実り多きものとなっているが、書とタイポグラフィーの緊密で補完的な関係性を論じた論文としても高く評価できるものとなっている。」と、お二人とも論文の構成とその精度について高く評価されている。

文字をコミュニケーションのための記号として捉え、その造形性から論じる西洋の書体文化に対して、書道を分析するのに共通した要素も多くあるが、中でも儒教、道教、仏教等宗教の影響による書体形成に言及するなど、東洋的書道の精神を汲み取るには的を得た視点と言える。また、点、線、面等念ではあるのに対し、書道では古くから面のみならずその濃淡で空間を表現するなど、着目点は多いことなどへの言及は興味深

い。

次にこれら論理立てた制作背景から生み出された作品について、井上副査は、「論文を背景とした草書体、行書体、隸書体、と点、線、面との織りなす新しい造形へのチャレンジは内容も深くオリジナリティに富んでいる。新しいタイポグラフィーとそれらを基にしたポスターの構成は博士研究として十分な成果を示している。」と評価しながらも、「ただ、惜しむらくは、論文の深く真摯な内容が作品形成において完璧な形で反映されていない面もある。特にタイポグラフィーというデザイン視点と申請者自身の今迄にないオリジナリティを強く出そうとし過ぎた造形面が、行書表現や、面表現において、かえって漢字本来の審美性を薄れさせ、バランスを欠く部分や、形態を意識するあまり書体の流れや、生き生きさを少し萎縮させた面もあった。」と指摘もし、付け加えて「ただ、それらは、高レベルの制作物故のさらなる期待であり、彼の今後の精神的な取り組みの成長によって解決されると思う。全体を通じて高い評価を与える。」と締めくくっている。

文字の源流を探り分析しながら、新しいタイポグラフィーへと繋げる道筋を論理立てすることは、制作にとっては基礎固めにすぎない。どのような構築物にするかは発想、感性、技術、目的、等に加えてオリジナリティが強く要求されてくる。造形的バランスやコミュニケーションの機能性と、デザインとしての新奇性との調和を何処に置くかは表現者のアイデンティティに起因するところである。作品上の違和感も計算にいられる技量もやがては身についてくだろうと期待する。

これら作品としてのタイポグラフィーの完成度には十分に高いものであると評価できる。それは随所に現れている開拓性のある文字としての造形性に加えて、書体が表情を持ちかつ人格を持つに至っていると観ることが出来、さらに今後が期待出来るからである。

総合的に判断して、博士の学位を授与されるのには十分な資格を有していると判断し合格とする。

主査 高橋善丸